

かとしきりに考ふるやうになりたりといひ、又或生徒は彼等の會議にてなしたる決議が眞の會議の決議に如何に近きかを見るのが楽しみなりといひたり。

(2) 彼等をして各國民の希望及び問題を知らんがため、現今の新聞雜誌を讀む心を鼓舞せしか。

確かに多くの生徒は此の點に於て、彼等の習慣に一變化を來せる事を自白せり。彼等は從來新聞の見出しに目を通し、又雜誌も時々讀みしが徹底的に又明確なる目的を以て讀まざりき。然るに委員會及び平和會議に於て、他の生徒の前にて確實に討論せんがために、彼等は日々新聞を精讀し、雜誌の中より平和問題を取扱へる記事、及びその問題の解決案を注意して探し出ださるべからざりき。但し其の動機は始は強利と名譽心とのためなりしが、後には其の問題に對する眞の興味、及び其の問題に關する知識を見出ださんとする欲望に變せりと多數の生徒は告白せり。

(3) 彼等をして平和會議の問題は數多く、且つ錯雜し、幾多の論争と、慎重なる考察との後僅に解

且つ絶へず發展しつゝあり、今形成せられつゝあり而して現在と共に未來をも包擁するものなる事を悟るに至れりと。

平和會議に參與せる生徒の、陳述によりて集められたる此の證據は學生の平和會議は、現在の要求に合したる手段なる事を證するが如し。我が中學上級生が時事問題を研究し、了解するに熱心なること、彼等にクラスにて會議せらるゝ問題に關係ある記事を、新聞雜誌より選擇し得る事、及び彼等は歴史界に於ける建設的の仕事、を、多少の指導を與ふればなし得る事を證して餘りありといふべし。而して現今の事件は、歴史の構成に影響を及ぼす諸勢力を生徒に示さんとする空前の奮發心を、歴史の教師に起さしむれど、他の出來事も絶えず新聞雜誌にて戰爭せられつゝあり。唯、比較的微弱なる刺戟を與ふる點に於て相違せるのみ。

ひかり

K. Y.

“Walk while ye have light” てんニイブルの中の聖

決せらるゝものなる事を發見せしめしか。

(4) 最後の媾和條件が公表せられたる時、それ等の條件は如何に多くの力によりて作られたるか、將た如何に多くの場合に於て妥協の結果なるかを悟らしむるやうになりしか。

一人の生徒は云へり。「戰爭は二三の合戦の後一方の軍隊が降伏し、媾和が成立して事終るものと思ひしが、和を結ぶ事の如何に困難なるかを知れり。」と。他の者は媾和を成立せしむる事の至難の仕事なるを發見せりといへり。どの生徒もかくまでの戰爭討議あるべしとは夢想せず、又一行の條文を取定むるにいくまでに時を要するとは、かつて悟らざるところありき。多くのものは、彼等が同問題を解決せんと努力したるがために、眞の平和會議の最後の決定を評價するによりよき位置にありとの信念を抱けり。

(5) 歴史は單に過去の記録にあらずして、生きたるものゝ力あるものなる事を示せしか。

多くの生徒はいへり。従前は、歴史を單に過去の事實の記録として見たりしが、歴史は死して葬り去られたるものにあらずして、潑刺として現在を支配し

句は、何を意味するものなるか。青春は再び來らず而して、それを樂しみ得る時はたゞしばしぞ。一たび來りて早くそれが汝を見棄てざるに先たちて、しかとそれを極め。人生は短し、汝の身體が朽ちてあの無情の土塊に歸し果つる前に、充分にそれを樂しみ味はへ。春には花を、秋には月を。その時々よろこびあはれびを身にしてみてふたゝびと受けられぬ生命の酒を飽くまで飲み味はへ、——といふ意味なるか。されどかくる思想は、全く過去を信せず、又未來を恐れざる現實主義、古くはギリシヤのヘレニズムに、もとづく思想にして、これに反抗して起り來りしクリスト教の聖典中にかゝる意味にて書かれたるかゝる句を見出すといふことは、如何にしても信じ得ざることなり。これ我が久しく疑問とせしところなり。

このごろトルストイの「光あるうち光の中を歩め」といふ書を繙くに及びて、始めてやゝその意味を悟ることを得たり、しかも猶わが理智は之を理解するに苦しむ。我が心の全部をもてそれを承認せんことはなかくにかたし。

「其處に二つの道あり。一は生命の道にして他は死滅の道なり。そのいづれを探ることも、そはたゞ人々の希望と選擇との自由にあるのみ」と同じ書にいふ。

生命とは信仰によりて絶えず神の御力を得、神の明るき道を迷ふことなく憂ふるところなく行くといふ。死滅とは之れ以外の大なるものを信することなき人の、その身と共に永久に滅びたるをいふ。而してその間は僅に距つる一步の差のみ。遂に千萬里相濟ふ能はざる兩極端に走れど、その始はわづかにへだつ一步の差のみ。

希望といひ道理といふ。されどわが信じ得る。或は憑據し得るすべては、唯一つの「生命」と「眞實」とにあるのみ。而してわが意味する「生命」は未だ「生命」「死滅」と相別る、以前の、即ちこの兩者をひとしく包含混同したるところのものにして、そのいづれにも至り得る可能をもつ、生れ出でたる生命そのものをいふなり。又敢て「眞實」といふあくまで我が現在の信念に眞實に、あらゆる思想或は生活を統御支配しゆかんとするものなり。「希望す」とか「選擇

す」とかは吾が輕蔑するところ、況んや一片我より出づる感情を以て二なき我が生命と生活を擧げてその向ふところに委し去ることをや。

神を信すること、神を欺くこと、は間一髪の差のみ、一度その差に氣附きたるものは、にはかに行きて神の前に拜跪する能はず。何となく懼れ、ためらはる、心地するはわればかりにや。かゝるいまはしき迷妄躊躇なくて、直ちに神の手に抱きとらるべき人々の幸福と平和とはげに、うらやむべし。しかれども又道づれもなく、只一人辿りゆく不信者の苦しき道を、苦しきが故にはかに棄て去るは卑怯ならん。生きよ。強かれ。耐へよ。と朝に夕に、みづから叫びはげみつゝ、ひたすらに如實の道を進みゆかば、いつかは報めらるべき何物にも得む——とてや、もすれば消え入りなむとする心の光を、辛く持ちつゞけて、こゝ一年余りは過ぎぬ。空しく過ぎぬ。報めは只「絶望」と「疲勞」とのみにして。

かくの如き心もて、このごろ切に思ひ祈る一つの事あり。即ち「光あるうち光の中を歩め」といふ言葉は、こゝも直さず、すべて、懷疑の中には光あり、

闇と悪魔とに虐げられてゐる、その光の消え滅ぶる前に、助け出してその中に汝の生命と生活を委ねよ——といふ意味にはあらざるか。あゝ、懷疑者の煩悶苦惱といふは、その心に死と生と、光と闇と、神と悪魔とが互に相争ひ、相反噬し合ふ叫喚と呻吟とにはあらざるか、おゝわが心の中の光！くらき懷疑の中にさまよへる光を早く救ひ出して、その中に生

くることをせずばやがて永久にわが「光」は消え去り失はれやせむ。懷疑はいつの間にか汝に、「死」と「闇」を殘して去りゆきやせむ。汝は眞實といふ、しかれども大なる力の「自然」は汝の眞實が恐れて迷ひ、避けんとしてたゆたひしところの「死」と「暗」を汝に投げ與へむとしつゝあるを知らずや。

見よ。トルストイが描きたるユリラスの生涯を。彼は「見知らぬ人」の教ふるが儘に、又最も「眞實の道」なりと彼れ自らが許し得しがまゝに、その道を勇敢に歩みつゞけたり。しかれどもその最後に於けるあの悲惨なる告白！

「さうだ、君がそこで君の靈魂の平和を發見すること——それは出来るだらう略々君は君の人生智を

社會から獲得した、さうしてそれを社會に返與するのは君の義務だ」

「見知らぬ人」がいふに答へて彼はいふ。
「併し私はまるきり何の知慧をも持つてゐない。私は誤謬の山に埋もれてゐる。私の誤謬は古い。併しいかに古くともそれは知慧にはなつてゐない。丁度それが如何に古く腐つてゐても、水は酒にはなれないと同じ様に」

と、かくして彼は外套を被て、遂にその家を去りぬ彼は遂に後れながらに「生命の道」へ歸りゆきぬ。而して既に消耗し盡されたる「信仰の火」を涙ながらにかき起さんとしぬ。

よろこびの微光は再びその心にもえ立ち、今ははや慈悲の大手に抱かれて、「安き」を得たるその胸は、「光あるうち光の中を歩まざりし」過去の後悔と懺悔との爲にいたくむせび入りぬ。

と、かくて彼は遂に永遠の平和と祝福とに満ちたる「生命の光」に歸りゆきしなり。
しかれども、こゝにかの斷えず知慧の實を彼れに供給して、あの驚くべき言説を弄したる「見知らぬ

人」は遂に、如何になりたるか。誘惑と知りつゝも猶彼の言葉には幾多の貴き真理と知を含めることをこばみ得ぬわれは！ユリラスにもましてその言葉に恍惚するわれは！わが晩年の悲劇はユリラスにもまして悲惨なるかも知れず。

さはれあの「見知らぬ人」はそもく神か悪魔かはた人なるか。

しかしながらその彼を描きたる或は作り出したる作者トルストイ自らは？彼れが晩年に於けるあの悲惨なる出奔！そは何を意味するものぞ。

彼は信仰厚きバンフイリラスを描き、見知らぬ人を描き主人公ユリラスをして一度二度三度までも見知らぬ人のまことらしき誘惑に陥らしめ、終には見知らぬ人を棄て、バンフイリラスの許へ走らしむその意圖するところは何ぞ。

あ、彼も亦八十幾歳をもて出奔せり。ユリラスは幾度か絶望し悲觀したれども、その都度行くべき慰安の懷を有ちぬ。しかれども彼には果してそれがありしか。そも彼は平和の臨終を持ちしか。おそらくはその偉大なる苦闘悪戦の生涯の最後に於て、遂に

匹をも、ねぎらひ迎へ給はむ。トルストイはそをわれに示せり。

只あくまで眞實に「如實の道を」「生命の道」を辿りゆけ。「光」にも猶かすけき「光」はあるべきを。(大正八、二、十一)

我等をして

ヤ、ツ、

我等をして、臆病なる人たらしむること勿れ。臆病は、我等が恥づべき不徳なり。

我等をして、水をも濁さぬ人たらしむること勿れ。地獄にも行き得ざる人たらしむること勿れ。

欲求はそれ自ら不善なる何物にも非ず。凡ての活動は欲求に淵源す。只、それを遂行すべき手段方法の正なるか將た邪なるかによりて、善なるか將た悪なるかの結果を生ずるのみ。

欲求をして盛ならしめよ。而してこれを正當に遂げしむる爲に冷靜なる理性を伴はしめよ。

正當なる手段方法をえらぶこと。此處に我等が一難處は生じ來る。

クライマックスの絶頂に達したるにはあらざりしか。

偉大なりし彼の人格！彼の生涯！バンフイリラスと見知らぬ人と、神と、悪魔と、光と、闇と、そのすべてを一心に収めてのあの大きな苦惱！彼は決してユリラスの如くその一つに迷ひ、その一つに安慰を得る底の人にてはあらざりしなり。

あの偉大なる人格の破綻、目もあてられぬ人生の大悲劇！

わが信奉する「生命」と「眞實」とは偉大なりしこの先人にしてかくの如き運命に到らしめしことを既に目撃せしわれ、そして再び小さきながらに、その同じ道へと踏み入らんとしつゝあるわれ。あゝわれ。

今にわれこの決心と覺悟とを有つ。「眞實」われを見棄つるか。われ、眞實と離るゝか。はた眞實がわれにそを命することあるに到るとき、而してその時なほわがうちにかすけき光の残りをらば、その時こそためらふどころなく「光の中を歩む」に到るべし。その時まで待つとも猶遲きに過ぐることはあるまじ神は廣き慈愛の御手を舉げて、さまよひし小羊の一

明らかなる理性をして、盲目なる本能の騎り手たらしめよ。理想をして現實を導かしめよ。靈をして肉を支配せしめよ。先づ我等をしてまことの眼を開かしめよ。

靈と肉とのいたましき苦闘。理性と感情との眞剣なる戦ひ。我等はこの戦闘の勇ましき雄さを見る毎に崇高なる感激のわが全身全靈をうごかすを覺ゆ。

未だこゝろみに遭はざる人は、既にこゝろみに遭ひ而して不幸そのこゝろみに失敗せる人を、そしるべき何等の權利をも有せず。

臆病者にして道徳人なる人は、その道徳人なる稱呼を我身にはこる何等の權利を有せず。

激しきこゑの苦闘に榮ある勝利を得たる人。その人こそは聲高らかにその稱呼を名乗り得べき人なれ。悪戯をする元氣もなき子供が悪戯をせずとて何とて賞むべきぞ。さ様な子供は醫師に伴れ行け。悪戯をすべき元氣ありて、しかも悪戯はせぬ子供こそ大いに賞むべき子供なれ。

されば若き我等をして元氣ならしめよ。而して我等をして常に正しからしめよ。